

Zun 寸 dō 胴

目 次

館蔵資料紹介 No 29	OPAC の利用案内	6
早野文庫と私の30年 杉原 利治	ILL (文献複写・貸借) 依頼の手順	8
新図書館システム紹介	Web による図書購入依頼手順	10
システム構成図	2007年外国雑誌購入変更リスト	12
閲覧システム		

館蔵資料紹介 No 29

早野文庫と私の30年

杉 原 利 治



岐阜大学には、寄贈文庫がいくつかある。このうち、早野文庫は、元学長、早野三郎名誉教授の寄贈図書、約860冊から成り、医学関係の書籍の他に、陶磁器や絵画の大型美術本が多いのが特徴である。とにかく大きくて重い。いずれもシリーズ本で、各一冊の重量は、「日本の陶磁 古代中世篇(3巻)」3.7kg、「東洋陶磁大観(12巻)」4.5kg、「文人畫粹編(13巻)」5.0kg、「Arte in Firenze(6巻)」6.3kg、「Leonardo Codice Atlantico(12巻)」9.1kg、「Nippon Siebold(5巻)」にいたっては、一冊が9.8kgもある。圧倒的ボリュームに驚かされる。これらの中で、特に目を引くのは、陶磁器関係の書籍である。

私が、古陶磁や漆器などに惹かれるようになったのはいつごろだろうか。

数寄者を、スキシャと読めば、余生を茶の道におくる、功成り遂げた老紳士がおもい浮かばれよう。しかし、スキモノとよべば、ガラクタにうつつを抜かず道楽者ということになる。当然、筆者は後者に属する。

もう、30年ほど前になるだろうか。岐阜大学へ赴任

してほどなく、縁あって私は、ハーバード大学医学部 E. R. Blout 教授のもとへ研究に赴いた。タンパク質構造研究の第一人者として名を馳せていた教授は、Medical School の Biophys. & Biochem. Dep. の head だけでなく、ハーバード公衆衛生学部の学部長、全米科学アカデミーの treasurer を兼ねていたのも、ボストンとニューヨークにある3つのオフィスをとりまわり、medical school の研究室にはほとんど姿を見せなかった。私の1年半の滞在中、ゆっくり話ができしたのは、到着時と帰国前の2回のみである。しかし、話をして驚いたのは、研究のことではなく、Blout 教授の日本文化、特に、陶磁器に対する造詣の深さだった。後に知ったのだが、益子焼の濱田庄司とも親交があったという。

だが、恥ずかしいことに私は、わび、寂び、粹といった日本文化はおろか、陶磁器の話にもほとんどついてゆけなかった。なにしろ、当時の私は、陶器と磁器の違いさえもはっきりしていなかったのだから。志野、織部... 聞いたことはある、黄瀬戸、キセト...!? 岐阜生まれ、岐阜育ちにもかかわらず、これらが、岐阜県で焼かれた



国宝秋草紋壺（「日本の陶磁古代中世編2」、中央公論社、昭和50年、より）

如何ともしがたかった。

当時、私は、『ヘテロな環境下における生体分子の構造と運動性』というテーマに取り組んでいた。病気のこともあり、論文をまとめるのがずいぶん遅れた。ある時、図書館の生命科学の速報誌を見て、自分の目をうたがった。スイスのグループが私が準備していたものとほぼ同一の研究論文を発表していたのである。それは、人工細胞膜中にロドプシンのモデルを組み立て、NMRによって解析するというものであり、対象物質や実験手法も全く同じであった。このグループの中心人物 K. Wüthrich は、構造生物学の擡頭となり、2002年、ノーベル賞を受賞した。レチナル部の光異性化を避けるためとはいえ、赤ランプの下で、ディスプレイ上のドットを読むのは、隻眼の身にはもはや無理であった。これを機に、私は、人間を対象とした環境とライフスタイルの関係へと研究テーマを変えることにした。学生時代から、環境問題の本質に迫るテーマに挑戦したいとの思いもあった。現在のアーミッシュやマオリ研究は、その延長線上にある。突然の転身に、ひどく驚いた知人も内外に多くいた。が、私の中では何の違和感もなく、事は連続していた。生体分子と環境との関係が、人間の生き方と環境との関係に変わったにすぎなかったからだ。ただし、人間の場合には、環境要素として、物理的パラメータの他に情報が加わるけれども。当時流行の言葉をかりれば、より複雑な系に挑むことになったのである。

これを契機に、私は、もうひとつの課題に挑戦することにした。陶磁器である。まずは勉強。気がいたら、図書館に早野文庫が残されていた。決して稀覯本ではないけれども、これらを開けば居ながらにして、名品の数々にめぐり会えるのである。重い重い大型美術本と格闘し、爾来、20年。数多くの泣き笑いをへて、今に至っている。

左右の写真を見較べていただきたい。ひとつは、有名

日本を代表する焼物であることさえも知らなかったのだ。

帰国してほどなく、目を患った。大学病院での手術は、初歩的なミスにより成功せず、一命はとりとめたものの、右眼を失うこととなった。眼科出身の早野学長にも世話になったが、あの態勢では



わたしの秋草紋壺（平安後期）

な国宝、渥美秋草紋壺、もう一つは、偶然に私の手許にきた須恵器様の陶器である。

朝鮮半島からもたらされた須恵器の技術は、基本的形態を踏襲しながらも和様に進化し、奈良時代にかけ、全国各地で膨大な量の器が生産された。そしてその後、須恵器は姿を消すこととなる。信楽、常滑や備前焼など、六古窯といわれる現代の焼物は、須恵器とは何の関係もないように見える。しかし、多くの窯跡

から、わずかではあるが初期の焼物（平安末～鎌倉初期）が発掘され、その中に須恵器様の焼物が散見される。つまり、これら中世古窯のごく初期には、須恵器に近い焼物が焼かれていたらしいのだ。瀬戸、渥美、常滑、猿投、湖西、渥美、亀山、越前、珠洲、信楽、丹波、備前...須恵器の流れをくむ古窯の多くはまもなく廃絶した。東海地方にもいくつかの中世古窯がある。岐阜県では、美濃須衛（現、各務ヶ原市須衛町）あたりに大規模な窯が、そして、多治見周辺、中津川、八百津、さらに郡上や飛騨にも窯があったらしい。

中世古窯の焼物については、数の少なさ、しかも、ほとんどが発掘品であるという点からも未知の部分が多い。中世（平安、鎌倉期）の陶器は、日本陶磁史の古代と近世をつなぐ、ミステリアスな焼物だといえよう。

これらの中世古窯で特徴的なのは、刻紋である。器表には、簡単な絵や文字、さらには記号など、籠彫りの刻紋がしばしば施されている。器壁に刻まれたこれらの紋様は、何とも味わい深いものである。

さて、この国宝秋草紋壺は、平安時代末期（西暦12世紀中頃）の短頸壺と呼ばれる器種である。慶応大学の工事現場から発掘されたこの壺は、現在、平安時代の陶磁器では、唯一、国宝に指定されている。

当初は、常滑の産と考えられていたが、現在では、多くの白瓷を生産して廃絶となった渥美窯のものとしてされている。外側へ大きくラップ状に開いた口。肩の張った造り。口頸部と胴の境をぐるりと補強する一段の突帯。いずれも、平安後期に特有の様式であり、蔵骨器として生産された当時の貴重品である。肩部にたっぷりかかった釉、器面いっぱい咲き誇る秋草、カラスウリの鶯と

葉、そして頸部の蜻蛉。まさに国宝の名に値する名品である。

一方、須恵器もどきの壺（“わたしの国宝”とひそかによんでいる）。地味な肌ながら、国宝秋草紋壺よりもさらに肩が張り、外側へ開いた口部はいつそう大きい。したがって、時代的にはもう少し遡るかもしれない。器表面や内部は、紐造りロク口成型の痕跡が歴然としている。肩には、やはり、2本の平行横線が引かれている。胴と口頸部の境にめぐらされた凸帯。ラッパ状の口縁部が外に少し折り曲げられているのも酷似している。そして、何よりも注目されるのは、この壺にもほぼ同じ秋草紋が見られることである。最も遅くまで還元炎焼成を続けていた珠洲窯の産であろうか。もし、須恵器のような乾いた肌でなければ、そして、自然釉が肩にかかっていたならば、とうてい、私の手許にはこなかった品だろう。

多種多様な器が夥しい数生産されていたにもかかわらず、須恵器には、典型的な壺型の器は意外に少ない。かわりに、ラッパ状の大きな口づくりの広口壺や長頸壺が一般的である。そして、須恵器生産の末期近くになると、長頸壺や広口壺の口が次第に小さくなり、いわゆる私たちになじみの深い壺型になったと考えられる。わたしの壺は、平安末期の様式をみごとに備えており、須恵器の終焉期につくられたものと考えられる。したがって、わたしの壺は、須恵器から中世古窯へいたる過度期の器であって、古代から中世への橋渡しの役をしていたと思えるのだ。須恵器から、白瓷器、そして、六古窯の陶器へと至る細い道筋を示している器ではないだろうか。



パンチェン土器
(タイ、BC5c)



馬の目皿 (江戸後期)

このように見えてくると、日本の中世陶器については、須恵器の技術が断絶し、まったく新たな焼き物が興ってきたということではないらしい。須恵器の還元焼成の乾いた肌から、鉄分が色ついた酸化焼成の肌、そして、人工の灰釉へと焼成法が変化し、それとともに器型も次第に変化して、近代的な焼物になってきたと考えられるのである。同様のことは、桃山陶としててもはやされている

る志野、黄瀬戸、織部などについてもいえるのではないだろうか。これらの茶陶は、江戸初期を過ぎると、美濃や瀬戸の窯から忽然と姿を消してしまったといわれている。が、江戸時代の日常雑器の文様にその名残を、ままみとめることができるのである。下の写真は、江戸中期に焼かれた瀬戸の台皿である。この頃になると、陶器は



瀬戸台皿 (江戸中期)

もはや特別の人だけが所有する物ではなくなり、広く一般に使われる器へと大きく様変わりした。このように庶民の器になった後も、まれに桃山から江戸初期の織部紋様がみてとれるのである。



アンダーソン土器 (『東洋陶磁大観』9巻、講談社、昭和51年、より)



インドの壺 (現代)

さらに、早野文庫をひもときながら、いまま少し私の蔵品を見てみたい。左下の写真の一枚は、パンチェン彩紋土器の壺(タイ、紀元前500年)、もう一つは、江戸後期に瀬戸、美濃で大量に焼かれた馬の目皿である。場所と時代は大きく異なるけれども、渦巻き模様は共通している。エジプト先史時代ゲルゼ期(紀元前3000年)にも、渦巻き模様の土器が焼かれている。また、上の写真は、現代のインドの壺とアンダーソン土器(中国仰韶文化期、紀元前2000年)である。幾何学模様がとても似ている。ペルシャの土器(紀元前1000-5000年)やインカの土器(10-15世紀)にも、同様の幾何学模様がある。焼物の紋様からすると、どうも、人間には、時間や空間を超えた共通の感覚があるのではないかと私には思えてならない。時空を超えた普遍性。これは、日本の伝統芸能である能楽の精神にも通じると思う。まだしばらくは、早野文庫の重い美術本と格闘する日々が続きそうである。

なお、早野文庫の他に、図書館の留学生用図書コーナーも見逃せない。ここには、陶磁器、和筆筥、根付けをはじめとして、日本文化についての貴重な書籍が揃っている。なぜか、この手の本のみるべきものは、日本語ではなく英文で書かれている場合が多い。このコーナーでも、日本人の優れた手わざになる小宇宙を満喫できるのである。

(すぎはら としはる : 教育学部教授)